要旨

一般的に、通訳がどういったものであるかについての理解は薄いという現実がある。通訳には、国際会議などで目にすることのある話者と並行して訳出行為を行う同時通訳と呼ばれるもの、また一定量話者が話を終えた後通訳者が訳出行為を行う逐次通訳と呼ばれるものもあり、いくつかの種類が存在するということはあまり知られていない。本研究では、そういった通訳の実態を少しでも明確にできるように、一般の人だけでなく英語学習者にさえも困難であると見なされている同時通訳に焦点を当てて調査を試みた。同時に、そのような同時通訳の戦略や方法を解き明かすことで通訳を見つめなおし、そこから何か見えてくるものはないかを探りたいというのも、本研究を始めるに至った動機である。実際、本研究を始めた当初、私の注目は主に通訳者の技術面に向けられていた。しかし、研究が進むにつれ、その時まであまり目を向けていなかった側面が明るみに出てきたのだった。それが、通訳者の文化的側面であった。この側面から通訳というものを捉えたとき、国際人として英語学習者を教育できる可能性が通訳研究には秘められているという考えが浮かび上がってきた。それに至る過程を再現して結論を示すために、本研究は三章により構成する。

まず第一章において、英語と日本語の同時通訳者が、言語間の文法的相違などの障害をどのように処理し、スピーチを聞いたとほぼ同時に巧みに訳出行為を行っているのかを分析する。それにあたって、同時通訳者が実際に直面する課題を分析するために、ライブで録画された『*the Victory Speech by Barack Obama in the U.S presidential election 2012*』を題材として扱った。この題材は、後に修正されて発表された日本語訳ではなく、その時担当の同時通訳者が実際に行った訳出が録音されているため、本研究に適していると考える。また、その分析の中で、同時通訳者が訳出をする過程での６つの特徴的な方法が発見された。具体的には、反復、削除、不自然な語順、推測、誤訳、文型の変化である。そして、それぞれを主に技術的側面から分析した。それぞれの特徴をさらに分類し、それに該当する具体例をスピーチから選出し、録音に忠実に実際のスピーチ原稿と日本語訳を例示した。それを踏まえて、それらの方法が訳出の際にどのように使用されるか、そしてどうしてそのような方法を選択するに至ったのかを調査・分析した。

次に第二章では、焦点を技術面から文化的側面へと移動させる。その理由は、第一章の分析を通して、通訳行為の過程において言語能力やテクニックのみでは解決できない問題が存在することが明らかになったからである。それを如実に証明するのは第一章で紹介した通訳者の「推測」である。ここでもう一度通訳者による「推測」について見直す。そこ

で通訳者の「準備」がそれを可能していることに触れる。続いて、「反復」用法の例を文化的側面から再分析することで、文化関連の問題を解決することができるカギも、通訳者による「準備」にあるということを明らかにする。ここでの準備とは、通訳者による「事前の知識吸収」である。そこで、通訳者の準備は通訳過程でどのように機能するのか、及びどのような準備が必要となるのかを調べるために、オバマ大統領の勝利演説を再度例にとる。その結果、通訳者は自身の知識や教養を幅広くし、また深めるために、スピーチの話題について多角的アプローチをとることが見えてくる。

さらに第三章において、それまでに明らかになった通訳の二つの側面を基に、最も特徴的である通訳者の「準備」を国際環境における人材育成へ応用できる可能性について論じる。まず現在の日本の英語教育の現状と日本での通訳訓練の状況を紹介する。そして、それを踏まえて「国際的人材」とは如何なるものかを定義する。ここで意味する真の人材とは、語学力を備えただけの人ではなく、それと併せて国際的な場で議論し意見を述べられる力を持った人材である。そしてこれを裏付けるために、著者自身の通訳者としての実体験にも言及する。また、国際的な場で討議する際には欠かせない「議論の流れを読む力」が通訳研究でもたらされ得ることについて、ディベートとの類似点から言及する。さらに、複数言語の習得を通訳教育の最低条件と考えるアメリカ、オーストラリア、イギリスなどの海外の通訳教育機関の現状にも触れ、それらの機関が語学力以外にどこに重点を置いているかについて着目する。それらをすべて鑑みて、通訳者にとって多才であること、言い換えれば教養が広くあることの重要性を強調する。その上で、一貫して分析研究してきた通訳者の姿と日本の求める国際的人材との間に共通点があることから、人材育成が通訳研究を通じて可能であることを示す。